

翻訳 『宮廷風恋愛について』  
解説 「チョーサーと宮廷風恋愛」

浅 香 佳 子\*

*The Book of Courtly Love*  
Chaucer and Courtly Live

Yoshiko Asaka\*

---

\*あさか よしこ：大阪国際大学人間科学部助教授〈2002.11.18受理〉

## 『宮廷風恋愛について』

浅 香 佳 子

### 『宮廷風恋愛について』

司祭アンドレの「愛の掟の三十一条」二

- 一 結婚は恋愛を妨げる真の口実とはなりえない。
- 二 嫉妬しない人は人を愛することができない。
- 三 何びとも二重の愛に拘束されてはならない。
- 四 愛は常に増大するか減少するものである。
- 五 愛人が愛する女性の意に反して得るものはすべてたしなみに欠ける。
- 六 男性は成人に達するまで愛することができない。
- 七 恋人が死んだら、遺された者は二年間のやもめ暮らしをしなければならない。
- 八 何びとも正当な理由なくして愛を奪われることはない。
- 九 何びとも愛の心情に促されずして愛することはできない。
- 十 愛は常に食欲の宿るところと相容れないものである。
- 十一 結婚するのが恥と思える女性を愛するのは適切ではない。
- 十二 真の愛人は自分の恋人以外の女性を抱擁したいとは思わない。
- 十三 愛はいったん公になると長続きはしない。
- 十四 容易に手に入る愛は軽視され、困難なほど、その愛の価値は高まる。
- 十五 愛人は皆愛する女性の前では顔青ざめる。
- 十六 愛する女性の姿が突然現れると、愛人の心はうち震える。
- 十七 新しい愛は古い愛を追いやる。
- 十八 誠実な人柄のみが愛に値するものである。
- 十九 もし愛が減少すれば、急速に衰退して再び増大するのは稀である。
- 二十 愛する者は常に不安にかられる。
- 二十一 真の嫉妬心は愛情をより大きく育む。
- 二十二 愛する相手に不信の念を抱くと、嫉妬と愛情がさらに増大する。

- 二三 愛の想いに悩む者は睡眠や食欲が減退する。
- 二四 愛人の行為はすべて愛する相手を思い心に終止する。
- 二五 真の愛人は愛する女性が喜ぶもの以外は何事も良しと思うことはない。
- 二六 愛人は愛する女性に何事も拒むことはない。
- 二七 愛人は愛する女性が与える愛の慰めに飽きることはない。
- 二八 愛人は実にささいな思い込みによつても、愛する女性に不安な疑いの心を抱くものだ。
- 二九 過度の情欲にかられる者は真に愛することにはならない。
- 三十 真の愛人は愛する女性の姿を絶えず心の中に想い描いてはうっとりする。
- 三一 女性にせよ男性にせよ、二人の異性に愛されることを禁ずるものは何もない。
- 司祭アンドレの『愛について』第一巻の対話5より。
- 一 貪欲は有害な疫病として避け、その反対の寛大さを奉ずべし。
- 二 愛する者のため、貞節を守るべし。
- 三 他人の正当な恋愛に故意に横槍を入れるべからず。
- 四 結婚を自ら恥じる女性を愛の対象に選ぶべからず。
- 五 嘘言は厳に慎むべし。
- 六 汝の愛の秘め事を知る多くの友を持つなかれ。
- 七 万事につき、汝の愛する女性の命令に従え、愛の奉仕に鋭意これ努めよ。
- 八 愛の喜びの交換には慎ましく、控え目であるべし。
- 九 口さがない者であるなかれ。
- 十 愛の密告者であるなかれ。
- 十一 何事にも上品で礼儀正しく振る舞うべし。
- 十二 愛の喜びを實踐するに、愛する女性の要望の粹を越えるなかれ。三(瀬谷幸男訳)
- シャンパーニュ伯爵夫人は淑女は恋人から如何なる贈り物を受け取るのが適切であるのかという質問を受けた。これに対し伯爵夫人は次のように答えを返した「女性は恋人から次のようなものを自由に受け取ってもよろしい。すなわち、ハンカチーフ、髪バンド、金や銀の飾り冠、胸につけるブローチ、手鏡、腹帯、財布、衣服につけるレースの飾り房、くし、手首覆い、手袋、指輪、香水箱、絵、小さな花瓶、皿、もつと大雑把に言えば、それを受け取ることで彼女が貪欲であると思われるものでないならば、愛する女性は恋人から身体を飾ったり引き立てたりするものや、あるいはまた彼女の愛する恋人を偲ばせる小さな贈り物であれば何でも受け取ってもよろしい。

はじめに

宮廷風恋愛は十二世紀のフランスで生まれて後、現実と文学の両方の世界において久しく、ヨーロッパ宮廷社会の理想となった。この恋愛は強く理想化された性的情熱——それは時代を問わず、あらゆる社会に見られる「恋におちいる」という情熱であるのだが——きわめて繊細で、洗練された情緒によって動かされる振舞いを重んじた。この愛のかたちがわたしたちの文化と社会、そしてわたしたちがロマンティックと考える愛に影響を及ぼすこととなった。この書は、はつと息をのむほど遠く、同時に馴染みのある、その愛の規範を跡をたどりそれを礼讃せんとするものである。

そもそも「宮廷風恋愛」の起源はどこにあるのか？その始まりはいつなのか？古代ローマ社会の有閑階級は恋愛礼讃の文学を好んで著した。四世紀の終わり、ローマ帝国崩壊後、現代のフランスの一部をなす旧ガリアを中心とした地方では、そのような洗練された楽しみを享受する生活は、うち続く野蛮人の侵入者たちの波によって一掃されてしまった。数百年間にもわたって彼らの社会には読み書きできる人がなかった。そのなかで生き長らえることができた文学といえば、いかめつらしい戦闘の叙事詩であり、戦争における血なまぐさい報復や死であった。しかし、南仏と北仏とは事情が異なっていた。異なった言語

によって南仏は北仏から切り離され（南のオック語にたいし北のオイル語）、中世前期を通して戦いにやぶれた北よりも一般に安定していた。ローマの法律と文化の嗜好と影響を色濃く残していた。そこでは比較的平和で繁栄していて、またムーア人のスペインの、より洗練されたアラブ社会に常に触れていたことにより、アキテーヌ、オーヴェルニュ、ポアトゥーの大貴族たちの宮廷の周辺に文明化された文化を育んだ。これらの宮廷にあつては十二世紀の変わり目以降、詩人、音楽家、そして歌い手の技術を合わせたトゥルバドゥール (*troubadours*)、文字とおりには「作曲家」を意味する)たちがいた。彼らは単なる放浪樂士以上の存在であり、賢く、機智に富み、この世的で、高い教育を受けていることが多く、この上なく巧みな才に長けていた。彼らは全く新しい詩的言葉の使い方を創造し、微妙で、複雑な抽象的思考と独創的なメタフォアを使用した。特に目を引いて新しいのは、トゥルバドゥールたちの書く技術ではなく、書く内容であった。彼らは愛について、愛する女性について書いた。トゥルバドゥールたちの詩のなかで、愛は宗教に似た言葉で礼讃され、愛された女性は崇拜の対象とされた。彼らはヴァーナス、キューピッドという独自の神とその神殿をもつ、宗教儀礼を発明し、恋する男が味わう苦しみを強調した。それは中世の社会で何らの力をもたない女性を、愛人にたいして完全に支配をふるう立場においたという意味では全く革新的であつ

た。愛された女性は支配権をもち、詩人は——現実の世界ではたとえ偉大な領主であったにせよ、彼女の召使いであり、へりくだって彼女の憐れみを請うた。恋愛詩はあたかも彼女が封建領主であるかのごとく、彼の貴婦人に対する臣従を表現している。彼女はしばしばミンドン (*midons*)——「私の」の女性形である *mia* と、男性名詞「領主」の (*domus*) を含む奇妙な合成語である——と呼ばれた。貴婦人の名前は明かされなかったが、等しく、しばしば明らかに詩人の領主の奥方であった。

こうした恋愛において、恋人が求めた究極の目的は、意中の女性との純粹に精神的・靈的な結合である場合もあり、より肉体的な結びつきである場合もあった。これらの文学の上での恋愛のなかで一体だけが現実の生活において成就していたのかを知ることは、事实上、不可能である。表面的に見れば、詩人が自分の領主の奥方と愛を交え、そしてそれを詩に謳いあげることなど、想像を絶するほど危険な行為であった。封建社会においては、領主の後継ぎは確実に彼自身の子供であることが絶対条件であり、臣下が自らの主君の奥方と情を通じることは、彼が犯しうる最大の裏切り行為と考えられていた。だが、当時の記録からみて、こうした恋歌を作詞することは、詩人その人と彼の意中の女性の双方に大きな「名譽」と「価値」をもたらすことだと考えられた。すなわち、それは詩人にとっては、地位とお金と庇護を、貴婦人にとっては地位と名声を得ることを

意味した。実際、恋歌の作詞は精巧につくられたお世辞であるといえ、貴婦人崇拜の背景には詩人と宮廷の聴衆たちの感情的・社会的な憧れがあったといつてよいだろう。

十二世紀は社会と文化が飛躍的な発展を遂げた時期であり、しばしば「ルネサンス」という名で呼ばれる。トゥルバドゥールたちの恋歌はたちまちのうちに北仏のトゥルヴェール (*trouvers*) と、ドイツのミンネジンガー (*minnesinger*) と呼ばれる叙情詩人たちによって模倣された。恋する者の情緒と苦悩を強調する宮廷風の洗練された愛の儀式は、既にあつた上流階級の文学、すなわちシャンソン・ド・ジェスト (*chansons de geste*) と呼ばれる武勳詩——シャルルマーニュ大帝やその他の軍を率いる高名な指揮者とその戦士たちの戦場における巧妙手柄を称えた詩のことであるが——の価値体系を変え、台頭しつつあつた浪漫文学に決定的な影を落とした。

冒険や恋愛物語の形式や長さはまちまちであつた。ブルトン・レー、すなわちブルターニュの物語として際立つ特徴をもつ恋愛詩は、普通は短く、古代ケルトの話を題材とし、きらびやかな超自然的な魔法が出現する。その中では往々にして妖精の世界から人間以外の人物が登場して恋の話を物語る。レーの作家で最も有名なのは女流詩人のマリー・ド・フランスである。彼女のレーにおいて、愛とは男と女によって等しく体験される、逆らうことのできない力のことである。マリーは女主人

公たちの情熱の昂まりと性的欲望をありのままに認めている。

より長い恋愛冒険物語(ロマンス)では、騎士である主人公に焦点をあてて描く傾向があった。それ以前の叙事詩文学からそれが一線を画する最大の点は、登場人物の感情、とりわけ愛の感情の強調にあった。貴族階級の男女の結びつきが、封建時代の貴族階級を実際に支配していた王家の権力固めや領土拡大や財政上の利害といったさし迫った事情からではなく、男女双方が体験する抗しがたい情熱——それは彼らを、或いは至福の喜びに、或いは全くの悲哀のどん底(往々にして生死を左右する類のものだが)に導いたが——によって決定されうるという新奇な考えは人の心に強く訴えた。これらのロマンス文学では、彼や彼女の疑い、不安、そして相矛盾する感情を強調した結果、愛と戦闘、行為と自己省察との間に緊張感を培うことだした。ロマンス文学においては洗練され高揚した感情を培うことで、戦士である英雄を礼節を身につけた宮廷人であるジェントルマンに変身させた。中世期を通してこのロマンティックな新しい愛の概念は、人に人間味を与えてより優雅にし、社会をより望ましい方向へと導くものだという議論が盛んになされた。叙事詩の戦士である英雄が彼の主君を守るために戦うのを特徴としたのに対し、ロマンスの主人公である騎士は意中の女性の愛にふさわしい価値がある証明として、また自らを高め、男としてそして騎士として身に備わった能力の完全な開花を求めて、武勇

の誉れを手にすることを望んだ。

古典期以降、ヨーロッパにおいて初めて、洗練された儀礼に身につけた存在、宮廷社会の一員としての男の地位が、女性に対する振舞いによっても判断されたのであった。この時期に書かれて長らく愛され今日まで残っている、ロマンティックな詩と散文の物語のなかにはこの情緒が反映されているものが少なくない。

十二世紀の後半までには、宮廷風恋愛の精神は体系化されて書き記された。すでに紀元前一世紀、偉大なローマの詩人のオウィディウスが『恋の技法』(Ars amatoria)を著していた。この書は物語や伝説を例に引いて、男が女の心をとらえる術を(悪戯けで)読者に指南伝授するために書かれた教訓集である。十二世紀の後半、恐らく一一八四年から一一八六年までの間に、このよく知られた古典の文学作品はアンドレ・ル・シャプラン——すなわち宮廷付司祭アンドレー——とかいう人物により、『正しき恋愛技法論』(De Arte Honesti Amandi)と呼ばれるラテン語の愛の手引き書のなかで当世風に再解釈された。アンドレは自分を王家の王宮付き司祭であると述べており、たびたびシヤンパーニュ伯夫人マリ(彼女はアンドレといういいおかかえの礼拝堂付司祭を擁していたことは知られている)の名を出していることから、また、トロワのクレティアンがマリの指図で同じ頃書いた『ランスロまたは荷車の騎士』(Lanslois, 一一七七一

八〇<sup>五</sup>とその中心思想が著しく類似していることから、アンドレはマリのシャンパーニュの宮廷にしばらくの間滞在して詩を書き、クレティアン自身を知っていたと推定されている。いずれにせよ、アンドレは高度に洗練された宮廷社会の一員として、教育のある、学識を身に備えた存在であったとさえ言えるであろう。だが、彼がそのなかで低い身分にあったことはほぼ確実である。

緻密に練り上げられた知的悪ふざけで、アンドレが『正しき恋愛技法論』を書いたと信じるに十分な根拠がある。彼はオウイデウスの姦通恋愛の主題を引き継いで、それに中世の特徴であるスコラ的な分析をほどこした。その結果、ひどく歪められた議論と逆説を産み出した——例えば、アンドレはまことの愛は婚姻のしぼりのなかには育たない（なぜなら、まことの愛に嫉妬は不可欠な要素だが、自分の配偶者に嫉妬をいだくことはあり得ないから）と語る一方で、同時にまことの愛——それは道徳に反する愛だが——は人を高貴にする力をもつとも語っている。オウイデウスは人が「恋におちいる」のは異性の性的魅力に強く惹きつけられた結果であると、きわめて率直に認めている。アンドレは冗談まじりの真面目さで、愛とは人を精神的に鍛錬する試練の一つであり、人が果すべき務めに近いものだと言う。まことの愛は夫婦間に存在し得ないというアンドレの主張は、長い間宮廷愛の特徴をなす不可欠な条件だと受け取

られてきた。

アンドレは欲望と認められる徴候群を両極端へと押しやる傾向があった。今日、アンドレの愛の論理学を読んで思わずくすくすと笑い出す人は少なからうが、中世の人々はその教義をたまたまなく滑稽だと感じた。われわれはアンドレの愛の掟の三十一条を深刻に受け取ることにはないにせよ、愛とはおおむねそのようなものだと言けるだろう。——今日には伝わっていないが、さらにおお真面目な愛の掟があったやもしれない。中世の人々は法規や規則を並べ立てるのが好きだったが、とりわけ騎士道、狩猟、食事の作法、そしてそれ以外に今日のわれわれに伝わる当時の上流階級の生活態度についての手引きが多く残されているなかで、『正しき恋愛技法論』が恋人の正しき振る舞いについて裁定を下した唯一の書であることは驚くべきことであろう。目新しい流行を楽しんだ宮廷社会が、ロマンティックな愛の是非をめぐって喧喧譁譁論争することを楽しんでいたことは、この書から明らかだ。その社会は複雑な道徳上のジレンマとねじれた逆説を好んだ。ある種の型にしがたつた行動様式が、よしんばそれが冗談半分であったにせよ、是認され規則として編まれるほどまでに、この頃までには充分に確立されてお馴染みのものになっていた。法規は生き長らえ、ある必要——混沌としてややもすれば破壊する力となる何かを意味あるものに変え、人生に秩序と経験を与えるもの——にに応じて確かな発展を

『宮廷風恋愛について』

とげていった。宮廷愛の華やかな断章に目をやり、美しく、そして常道を逸した「宮廷愛」の殿堂を再現し、今なお認められ、われわれが体験する力強い感情と関連付けることは、西暦二千年を迎えた我々にとってもあながち無意味なことではあるまい。

陽の光を浴びて 雲雀が

喜びのあまり羽ばたき舞い上がり

やがて心に広がる甘美の感覚に

われを忘れて落ちる姿を見るとき

ああ、どれほど羨ましく思えることか

恋の喜びに耽る人々の姿が

われながら訝しく思える その一瞬

渴望にこの胸がはり裂けぬは何故か。

ああ、愛に詳しい自分だと信じていたのに

ああ、知らぬことの何と多かつたことか

愛して甲斐のないひとを

なお愛さずにはいられない

あのひとは 私の心を 私の存在を、

あのひと自身を 全世界を取り上げて

私から逃れ去る あとに残したものは

渴望と 恋に焦がれる心だけ

もう私にはあらゆる力が失せてしまった

われとわが身が自分のものでなくなった、

わが心を魅了してやまぬあの鏡、

あの瞳を覗きこませてくれたあのときから。

鏡よ、おまえのうちに私自身の姿を見て以来、

深々とつく溜息が私の命を奪ってしまい、

美しいナルシスが泉で身を滅ぼしたように、

私もわが身を滅ぼしたのだ。

私はもう女というものには絶望している、

これからは決して信じたりはすまい。

以前あがめていたのと同じだけ

これからは女たちを見下してやるぞ。

私を破滅させ惑乱させた女にたち向かうのに

加勢してくれる女性はひとりもない

女という女はみんな恐ろしく、信じられない、

女がみんな同じだということをとくと知っているからには。

わが貴婦人もその意味ではまさに女にほかならず、

さればこそ私はあの女を咎めるのだ、

なぜとてあの女は願うべき事を願わず



禁じられていることをしているから。

ベルナルド・ヴァンタドゥール

## 第一章

苦しみに満ちた歎び、甘い痛み

一目惚れは、多少ともロマンティックな愛の語りぐさになってしまった。にもかかわらず、それは現実以外の何ものでもない何か——理性や知識ではない、しかし単なる情欲よりはるかに意味の深いものに動かされて、一瞬のうちに一人の異性に強く魅せられてしまう力——に扱っている。幸いにも、この体験をしたことのある者は誰でも——今日の文学、音楽と映画を信じてとすれば、数え切れないほど多くの体験をしてきたであろうが——わたしたちが誰かを初めて見た瞬間に恋に陥ることは全く可能なのだということを知っているし、それはいまなお、広範囲の西欧文化において祝福されている現象なのである。これがわたしたちに起こると、対象となる女性や男性の性格や感情について、本当の知識をもっていないという事実にもかかわらず、心に感じる確かなものがあるという感覚により、本当に神秘的な何かがあると思ってしまう。突然に、真なるものを見抜く不思議な感じを、中世の人々は何か外部の力によって攻撃されるように感じた——愛という名の実物の人間が、抗しがた

い情熱の葉を矢尻につけて矢を放つのである。今日、わたしたちは魔法を愛とか異教の神に人格をもたせた人間というより、寧ろ抽象的どころにでも遍在する力だと考えがちだが、魔法の力をもった確かなものの存在は依然として有効で強力な概念である。

宮廷風の愛人の世界では、愛はいつも一目惚れに始まるというてよい。男の目が恋する女性の姿をとらえた瞬間に〈愛〉の矢が愛人の両の目を貫通して彼を射ぬき、まっすぐ心臓に達するのである。アンドレはこの瞬間をつぎのように表現している。

愛されるにふさわしい女性を見て、その姿、形が気に入ると、ただちに彼女を心の中で熱望し始める。後で彼女を想えば想うほど、いつそう恋の炎に燃え、遂にはその想いでいっぱいになる。(第一巻、第一章)

換言すれば、瞬時に惹きつけられる愛によって、彼はすぐさま節度なく相手を欲し、所有したいという思いにとらわれるのである。古えのロマンス作家も同様の考えをもっている。

〈愛〉がねらいを定めてその矢を

あの女性の心にうち放つと——彼女はしばしば青ざめ突然汗にま

みれる。抗しがたい力にとらえられて、彼女は愛さざるを得ない。

(トロワのクレティアン『クリジエス』七)

「愛」はイヴァンをかくも優しく打ちつけたので彼の目を通つて心にまで達した。このようにして、「愛」は彼女の復讐をなし遂げた。

(トロワのクレティアン、『イヴァン』八)

△愛 がその矢をうち放ちわたしの身を焼き心を燃え上がらせるような目に遭つたことがないのですか？

それは悪意に満ちた行為だつたと思います。

矢尻に毒が塗つてあり、二箇所に傷を負いました。

耳と目にかくも激しい痛みをおぼえる

攻撃を受けたのですから。

的を外さずに弓を射る△愛神Vほどの

名射手はいまだに見たことはありません。

(作者不詳『フラメンカ物語』七〇六—七二一行) 九

後の作家たちはこの恋の矢の比喻について詳しく述べている。男にとって致命的な最初の愛の一瞥に始まる恋のプロセスは、

チヨースターの『騎士の物語』に劇的に表現されている。従兄弟同士であり兄弟としての誓いをたてたパラモンとアルシーテは、戦争でアテネのテセウス公の捕虜となり塔の牢獄のなかに監禁された。塔のそばの庭で花を摘む美しいエミリーの姿を、まずパラモンがとらえた。

パラモンはエミリー姫の上に視線を投げかけたのでした。それと同時に彼は目がくらみ、「ああ！」と叫び声をあげたのでした。それはあたかも心臓になにかものが突き刺さつたかのようなでした。その叫び声を聞いて、アルシーテがすぐ立ち上がつて言いました、「わがいとこよ、どうしたというのだ。こんなに青ざめてまるで死人のような顔色じゃないか。」…パラモンはこれに答えて言いました、「わたしはたつた今、わたしの目を通して心の中に傷をうけたのだ。それがわたしの死の原因となることだろう。むこうの庭の中をあちこち逍遙している人が見えるか、あの貴婦人の美しさが、わたしの叫び声や嘆きのすべての原因なんだ。」一〇。

(『騎士の物語』一〇七四—一一〇〇行)

チヨースターが後に描いた壮大な恋の物語『トロイラスとクリセイデ』では、トロイアのアテナ女神を祀った神殿でトロイラス

の視線が初めてクリセイデをとらえた時のことを、さらにはつきりと述べている。

たまたま彼の視線は、群集の間を縫って奥深く進み、クリセイデの姿に突き当たると、そこに釘付けになってしまったのです。

その瞬間、彼ははっとしましたが、しげしげ注意して、もつとよく見直しました。「おやおや、何処に住んでる人かしら、よく見ると、随分きれいで上品だな、そう思うと同時に、胸はふくれ高まって来ましたが、うっかり喋って人に聞かれてはと、ひそかに溜息をつきながら、またもとのふざけた顔につくろうのでした。

…その姿を眺めていると、彼の心の中にはげしい欲情と愛情がむらむらと湧き起こってきて、この女性の印象が、胸の奥底にしっかりと深く刻みつけられたのでした。初めのうちこそ、あちらこちらを、しげしげ眺めまわしてしましたけれども、今や、いわゆる、角を引つ込めたいような気持で、目のやり場、瞬きの仕方さえ、殆ど分からない始末です。二

〔トロイラスとクリセイデ〕二七—三〇一行 三

一人の女性の存在を意識する自分に気づいたトロイラスの様子を表現したものが、このような場合に現代人がよく使う決まった質問「何処に住んでる人かしら？」を中世風に表現したものを見てよいだろう。だが実際、ここには新しい恋の理論が含まれている。つまり、チョーサーは恋におちいる瞬間を愛が矢を放つというイメージを用いて表現してはいない。第三連は古代ギリシャに遡り、哲学者プラトンに受け入れられた映像の理論に言及したものが、その理論によると、目はそれが放つ光線を対象物のなかに送りこむことによって物を視るのである。それゆえ、視線と視線が出会うと、一人の目から放たれた光がもう一人の見る者の目を貫き、ここで起こっているように、恋する男の心に彼の愛しの女性の像が植え込まれたように——あなたも硬貨に像が刻みつけられるごとく——感ずるのである。ここでもやはり、何ものかに肉体が侵され、攻撃をうけ、突き通される、という感じを強く受けるが、そのものこそ、愛が生ずれば、誰しもそれに逆らうことができないう力に他ならぬ。い。

ひとたび、恋する男が女性の姿を目にして愛に打たれるや、彼あるいは彼女は次の段階、すなわち愛を感じてはいるが、まだ相手に自分の存在に気づいてもらうには至っていない段階へと進む。そこで彼は恋愛の掟の核心部分をなす「愛とは苦しみであるという」という命題に出会うことになる。事実、アンド

レのいう愛の定義はまさにそれ以外の何ものでもない。

愛とは美しい異性を見て、それを極端に想い詰めることから生まれる一種の生得的な苦しみである。それは、愛する者が何よりも相手を抱擁してお互いの欲望に従い、愛のすべての掟を成就したいと願う心から出る苦しみである。三

（『愛について』第一卷、第一章）

太古の昔から、恋とは苦悩と苦痛にみちた状態であると表現されてきた。しかし中世の人々がたいそう好んだパラドックスの一つによると、恋とは甘美な苦しみであり、恋する者はその想いを放棄してしまうより耐えることをはるかに望むものである。この苦しみは様々な形で表面化したか、いずれの場合もその根底にあるものは、恐れ、そして愛が成就せぬことへの満たされぬ気持ちの二つの要素といえる。初めの要素はアンドレがその恋の掟の何か条かで効果的に述べているように、身体的な徴候をとまなう。

愛人は皆愛しの女性の前では顔面は蒼白となる。愛する女性の姿が突然現れると、愛人の心臓は鼓動し始める。愛の思いに悩む者は睡眠や食欲が減退する。

二つめの苦しみは、恋する者の頭を必ずと言ってよいほど悩ませる精神的なものに起因する。愛とは苦しみに満ちた経験であることは疑いの余地がない、とアンドレが自信をもって言い切るのは、恋人には自分の愛が成就しないのではないかという恐怖がたえずつきまとうからである。

愛することは大きな苦しみをともなうものだが、同時に大きな喜びともなる。その行く末がどうであれ、また恋路がさえぎられることがあるうと、愛する男は決して諦めることをしない。トウルバドゥールの一人、アーノート・ダニエルによつて書かれた次の詩歌は、そのことをよく説明している。

日ごとに私はすぐれた者となり、輝きを増してゆく、  
世にまたとなく気高い方にお仕えし、その方を崇めているから。  
そのことを皆々様にはつきりと申し上げよう。  
私は頭のとっぺんから爪先まであの方のもの。

冷たい風が吹きすさぶうとも、  
わが心に雨のように降りそそぐ愛が  
真冬でも私を暖かくしてくれる。：

教皇の座に登ることもわれは求めず  
その人想うてわが心燃え、張り裂ける

あの方のもとへ立ち戻れないのなら。

新たな年がめぐり来る前に、あの方が

接吻もてわが苦悩を癒してくださらぬのなら、

私を殺し、地獄へ堕ちてしまわれよう。

身を責めるこの苦悩にもかかわらず、

あの方を深く愛することをやめず

私はこの身を孤独のうちに置く、

そうすれば韻を踏んだ言葉が綴れるから。

：

これなるはアルナウト、風を集め、

牛を用いて兎を狩し、

流れに逆らつて泳ぐ者。一四

意中の女性に愛を打ち明けられずいたり、自分の愛が報われるという確信をもてないと、恋する男たちは往々にしてそれにも増して哀れな苦境におちいつてしまう。たとえば、クレティアン・ド・トロアの『クリジエス』(Cliges)の恋人たち、アレクザンダーとソルダモールは、互いにもあまりにも内気なために、相手に愛を打ち明けることができないまま悶々とし、アンドレの言う「恋の病の症候群」に苦しめられる日々を送る。

ソルダモールは彼女の大きな誇りと、人を見下したことへ

の高い代価を支払った。愛は浴槽の水を熱し彼女を燃やしてやけどをさせた。：グニヴェール王妃は気付いていて、この二人がよく顔を赤らめたり、青ざめたり、溜息をついて震えたりするのを目にした：アレクサンデルの心は、彼を深く傷つけた人への思いでいつもいっぱいになった。というのはソルダモールは彼の心を苦しめたあまり、彼はベッドの上で輻反側し休息することができなかったからである。：一晩中、ソルダモールはかくも激しい苦しみのなかにあつたので、休息も眠りもあえなかつた。愛は彼女の心を苦しめる葛藤と狂気をその体のなかに閉じ込めた。彼の思い出は常に彼女につきまとい苦しめたので、夜通し泣いていた―嘆き、寝返りをうち、震えた。

クリセイデの致命的な姿を目にした後、同じ悩みがトロイラスを苦しめる。

そののちずっと、彼は恋ゆえに眠りもあえず、食事をとることもひどく嫌い、そしてまた、その悲しみは次第にはげしくなっていくって、気をつけて眺める誰の目にも、朝な夕な、その悲しみが色に出て、それと知られるのでした。：ともあれ、トゥロイラスの苦悩はまことに大きくて、気も狂わんばかりです。無理ありません、あの女はすでに

誰かほかの男性に愛を感じていて、自分などは歯牙にもか  
けないのではないか、そういうことが絶えず気になったの  
ですから。

(『トロイラスとクリセイデ』第一巻、四八四—九十、四九八  
—五〇四) 一五

これらは極端でまわりくどい例に思われようが、今日の多くの  
人々にとってなじみのある感覚が、ほんの少し誇張され様式化  
されたものにすぎない。宮廷風の愛人が突然に青ざめてはまた  
赤くなり、汗をかいたり心臓がどきどきしたりする場面に出く  
わすと、現代の読者はそれが強く性的に惹きつけられたことへ  
の身体的症候だということがはつきりと分かる。直接、連絡を  
とりあうことに慣れ、また制約を受けることがより少なくなっ  
た結果、愛が見過ごされたまま長く置かれることははるかに少  
なくなつた今日であるとはいえ、恋におちいった者が輾転反側  
して眠れぬ夜を過ごすことや、愛が報いられないことへの危険  
をはらんだ恐れ慄きを体験することは、今日でも昔とかわりな  
く起こりうることである。

いとしい恋人よ、あなたが私にくださつた  
贈り物の指輪はわが心に大きな慰みをもたらす。  
それによりてわが悲しみは減じ

それを見つめる時、ムクドリより  
なおいつそう心軽やかにはずむ。

あなたゆえに私の心は勇気みち、  
槍も矢も、いな鋼や鉄でさえ、

私に害をなそうとも、私は恐れない。

だが、あなたを愛するあまりに

もう一方では私の心は翳り深い絶望のなかへと沈む

小舟が波風に揺さぶられ

波間にゆられるよりも強く、

あなたへの想いが私を激しく苦しめる。

いとしい淑女よ、城が

権勢ある諸侯たちによつて包圍されるごとくに

弩が小塔を砲撃し、

大投石機器のたぐいが

四方八方から極悪非道に攻め落とす。

いかなる仕掛けも策も効を奏さず、

城のなかの人々は地獄の苦しみをなめ、

阿鼻叫喚の巷と化す。

彼らは慈悲を求めて声をあげるべきだと

あなたには思われますまいか。

されば、私はへりくだつてあなたの憐れみを求めよう。

貴婦人よ、一匹の子羊は

一匹の熊の前には無力なごとくに

わたしも一本の葦よりか弱い存在にすぎませぬ

もし、あなたの価値ある手助けを得られないとあれば、

私の誤りを正さぬという事実により、

私が被害を被るたびに、

わが命は四分の一ずつ縮まり

短くなりゆく。

貴なる恋人たちを愚かな振舞いより護るべき

へ至純の愛のあなた様は私を庇護し、

わが愛しの女性の前の私を護りたまえ。

かの女性は私をかくも強く私を打ちのめすから。

放浪樂士よ、これらの新しい恋歌とともに、

ここを去り、最高のものを私にくれた

かの美しい女性の前にそれらを持って行ってください。

そして私はあなたが身につける外套より

もっと身近にあなたのものですと、かの人に伝えて下さい。

ギラウト・デ・ボルネイユ<sup>二六</sup>

## 第二章

### 幸福の追求

恋におちいり、いまだその報いを得られずにいる間は、誰し

も激しい苦しみを味わう。宮廷世界の恋人は彼の秘密を胸に秘

めている状態には飽き足らずに、拒絶されることへの恐れが大

きくても、ついには、自分の愛をその対象である女性に知らせ

たいという思いに駆られる。多くの危険をはらんだ難しい時期

である。愛人は恥ずかしいという思いでぼうつと感覚が麻痺し

てしまうかもしれない。もし、意中の女性が彼より社会的には

るかに身分が上の淑女だとすれば、彼女に近づいて思いのたけ

を打ち明けるに物理的な障害があるかもしれないし、それでな

くても、激しく思いつめたあまりに、病を得て恋を成就させる

エネルギーをなくしてしまうかもしれない。

にもかかわらず、挑戦してみずには彼の気持ちはおさまらな

い。かくしてマリー・ド・フランスのブルトン・レーの一つ

『ギジュマール』の主人公のギジュマールは、勇気をふるって

心の奥底の思いのたけを選ばれた恋人に伝えようとする。

もし誠実な恋人を見いだしたなら、その人に任せ、その人

を恋し、その意のままにならねばならぬ。ギジュマールは

激しく恋していた。自分はずいさま救われるのか。それと

も、思い屈して生きながらえるのか。恋はギジュマールを

大胆にした。彼は胸の思いを奥方に明かした、

「奥方さま、あなたゆえに息も絶えそです。心は悶え苦

しんでおります。もし私を癒して下さらなければ、ついには死ぬよりほかにありません。恋の娛しみをかなえて下さい。美しい方よ、どうかお断りなさいませぬよう」

(マリ・ド・フランス『ギジュマール』四九三―五〇六行) 一七

この場合、ギジュマールのあからさまな求愛が実を結んで、彼がめでたく恋を手にすることができたのは、幸運にも相手の女性も同じように彼に恋をしていたからに他ならない。だが残念なことに、いつもこのような望ましい恋の成就が得られるわけではない。ロマンスのギー・オブ・ウオーウィックでは、主人公のギーは伯爵の娘に恋をする。彼は伯爵の執事の息子で、身分の低い騎士の盾持ちでしかなく、フェリスの高貴な身分に気後れた。その上、彼女の父君にたいして生意気にも堂々と自らの恋を宣言をしたことで、彼女に拒絶されるかもしれないという恐れにもかかわらず、彼はすべてを投げだしてでも、自分の愛を告白したいと思った。

ギーは宮廷に参上し、

悲しみに心かき乱された人のように、

美しいフェリスの真前に、

身を投げ出して跪き

そして言った「美しいフェリスよ、お慈悲を！」

神の愛と聖母マリアの愛のおとりなしにより、  
わが訴えに耳を傾けてください

(『ギー・オブ・ウオーウィック』三四一―三七六) 一八

不幸にも、フェリスはギーの燃える情熱に常識という冷水を浴びせかけ、父に話す前に即刻立ち去るが良いと彼に命じた。ギーは怖気づいてその場を立ち去ったものの、苦しみに悶えて眠れぬ夜がさらに彼を苦しめた。ギーは、それでも宮廷に引き返し、たとえフェリスが父上に告げ口しても自分は構うものかと宣言した。

チヨースターの『トロイラスとクリセイデ』において、この求愛術のみごとな展開をみるが、ここではトロイラスの叔父のパンダラスが彼のクリセイデに対する愛を告げる役割をになって登場する。しかし、彼は単に彼女に知らせること以上に、はるかにたくさんのことを果たす。

「ねえ、お前、王様ご寵愛の王子様のことなんだ、善良、聡明、勇敢、健康、そして寛大で、絶えず善行を施すことが習慣になつていて、というような、王子様のことなんだがね、つまり、あの高貴なトロイラスさんが、とてもお前に熱を上げていられるんだよ。それで、もしお前がお助



けしなければ、お命も危ないってわけなんだ。そうだ、これだけのことなんだよ、これ以上何も言うことはないよ。あの方のお命をどうしようと、お前の好きなようにするがいいさ。

だけど、もしお前のためにあの方のお命に万一のことがあれば、ぼくも生きてはいけない積りだ。いまぼくの言うことを信じてもらいたい、ねえ、お前、嘘はつかないよ、この小刀で喉を掻き切っても。」こう言うと同時に、パンダラスの眼から涙が溢れ出てきましたが、彼は更に言葉をつづけました、「罪もないのに、われわれ二人を殺した暁には、お前は大漁を祝うかもしれない、だが、われわれ二人が破滅したからって、どれだけお前の得になるだろう。

ああ、ぼくの親愛なる主君、誠実な人、お前の好意的な態度をひたすら望まれる崇高温雅な騎士、それを運命がよしとするならば、命を絶とうと、胸を張って、力一杯、急いで行こうとされる今この時、あの方のお命が絶える様子が眼に見えるようだ。ああ、持って生まれたお前の美しさが恨めしいよ

お前も知っているとおり、あのように誠実で立派な方、その方が死のうとしていられるのに、道化師か、やくざ男が死にでもするように、一顧さえ与えようとしないのかい、お

前の心がそれほど冷酷だとすれば、いくら顔が美しいからって、そのような冷たい行爲を償うべくもないね。困らないうちに、よくよく考えてみるがいい。

靈験なき燦たる宝石は禍なるかな！効験なき薬草また禍なるかな！憐れみ薄き美女は禍なるかな！人を足下に踏まえん者は禍なるかな！美という美を一身に集めているお前に、美に加えるに、憐れみの情がないんだとすればだ、たしかに、お前の生きていくことはむしろ害悪だよ。」

(「チヨースー『トロイラスとクリセイデ』第二巻、三一六—三五〇行)

この一節には、クリセイデに二様に働きかけようとする巧妙な意図がみてとれる。まず最初に、トゥロイラスがいま恋の苦悩ゆえに死に瀕しているのは、美という美を一身に集めたクリセイデの罪過であるということ、そしてまた彼女のように致命的な美しさをもつ者は、その美に打たれた者に対して寛い心で親切にする義務があるのだということを説いて、女性の心に罪悪感と義務感を植え付けている。第二番目に、このような彼女への責めは実はお世辞であり、彼女の自尊心をくすぐろうと意図されたものである。

恋人たらんと期待する男が、彼の愛しの女性の愛情を手に入

れるために用いるべき技術について司祭アンドレが説明している部分は、およそロマンティックなものからはほど遠い。『愛について』の第一巻には、平民階級の男性が同じ階級の女性、貴族、大貴族の女性を口説く方法、またジェントルマンはいかに愛を達成すべきかなどについての指南伝授が含まれている。

会話自体は長たらく引き伸ばされた知的議論だが、その目的とするところは明らかに女をベッドに誘い込む口説きのテクニクである。例えば、貴族の男と平民の女の間に関わされた会話は、貴族の女性と卑しい生まれの女の内面の気高さは、どちらが賞讃に値するかについての判断を彼女に委ねるところから始まる。女は貴族の女性だと答える。良質の木材より品質の落ちる木材で船をつくる親方の技術をより高く評価すべきだが、それと同じように、卑しい生まれの女の内面の気高さの方がもっと価値があるものだから、それは間違いだと言男は反駁する。立派なものが稀少であれば、確かにより値打ちがあるといえるでしょう、と女は譲歩する。男は彼女のすぐれた人格ゆえにあなたを愛するのだと女に宣言する。それに対し、女は自分と同じ階級の人以外の女に求愛するべきではないと言葉を返した。

彼女は相手の発言を逆手にとつて、あなたは気高い人柄の平民の女を恋人とすべきだと結論されるが、それならばなぜ、わたしがあなたを愛人として選び、立派な人柄の平民出の男ではない

けないとおっしゃるのですか。議論は延々と続いた。遂に彼は感情に翻弄されて、もし貴方が僕を拒めば、ただちに僕を死に追いやることになるでしょう、と脅迫手段に訴える。少し冷やかしの言葉を彼が投げかけた後に、彼の言った言葉の魔力は効を奏し始める。

女「もしあなたが熱心に口頭で約束されたことを根気よく実行に移されましたら、それでもなお、私なり他の女性によつてその努力に見合う十分な報酬を与えられないということは、ま

ず起こりえないでしょう。」  
男「神よ、願わくば、貴女の言葉に真実が込められておりますように。身体はあなたの眼の前から消え去るように見えても、心の中では依然として固い絆で貴女と結ばれ続けるでしょう。」

一 本稿はAndrea Hopkins, *The Book of Courty Love: The Passionate Code of the Troubadours* (Labyrinth Publishing, 1994) から訳出したものに注と参考文献を付したものである。

二 アンドレアス・カペルラーヌス『宮廷風恋愛について』ヨーロッパ中世の恋愛指南書『瀬谷幸男訳(南雲堂、一九九三年)、第二巻の日本語訳を引用。

三 瀬谷幸男訳。

四 樋口勝彦訳『オウイディウス』『恋の技法』(一九九五年、平凡社)

五 神沢栄三『ランスロまたは荷車の騎士』『フランス中世文学集第二

巻愛と剣と』(白水社、一九九二年)

六 新倉俊一訳、ベルナルド・ヴァンタドゥール『陽の光を浴び

て 雲雀が「新倉俊一、上沢栄三、天沢退二郎訳『フランス中世文学集第一巻信仰と愛』(白水社、一九九〇年)

Can Vella Luzeta Mover

Can vei la lauzeta mover

De joi sas alas contra, l'rai,

Que s'oblid'e, s'laisa chaser

Per la doussor c'al cor li vai,

Ai tan grans enveya m'en ve

De cui qu'eu veyra jauzion.

Meravilhas ai car desse

Lo cor de dezier no. mo fon.

Ai las tan cuidava saber

D' amor, e tan petit en sai.

Car eu d'amar no. m'posc tener

Celeis don ja pro non aurai.

Tout m'a mo cor e tout m'a me,

E se mezeis e tot lo mon

E can se. m' tole no. m'laisset re

Mas dezier e cor volon.

De las domnas me dezesper;

Ja mais en lor no. n'farai,

C'aisi com las solh chaptener

Enaissi las deschaptenrai.

Pois vei c'una pro no n'en te

Vas leis que. m'ndestrui e. m' coforn,

Totas las dopi'e las mescre  
Car be sai c'atretals se son.

D' aisso. s fa be femna parer

Ma donna per qu' e. lh o retrai,

Car novol so c'com deu voler

Eso c'om li deveida, fai.

七 Chrétien de Troyes, *Arthurian Romances*, trans. D.D.R. Owen (London, J.M. Dent, 1987)を参照。

八 *Arthurian Romances* 邦訳として、菊池淑子訳『獅子の騎士—フランクスのアーサー王物語』(平凡社、一九九四年)がある。

九 筆者訳、ただし見目誠訳『フラメンカ物語』(一九九六年、未知谷)を参考にした。

一〇 榊井迪夫訳『カンタベリー物語』(岩波文庫、一九九五年)と西脇順三郎訳『カンタベリー物語』(ちくま文庫、一九八七年)を参考にした。

一一 And vp-on cas bifel that thourgh a route

His eye precede, and so depe it wente,

T'ill on Criseyde it smote, and ther it stente.

And sodehyly he wax ther-with asoned,

And gan hir bet biholde in thrifty wise.

"O mercy god," thoughte he, "wher hastow woned,

That art so feyre and goodly to deuise?"

Therwith his herte gan to sprede and rise,

And softe sighed, lest men myghte hym here,

And caught ageyn his firste pleyninge chere...

And of hire look in him ther gan to quyken  
 So gret desire and swich affeccoun,  
 That in his hertes bothe gan to sitken  
 Of hir his fixe and depe impressoun;  
 And though he erst hade poured vp and down,  
 was tho glad his hornes in-to shrinke;

Unmethes wiste he how to loke or wynke. (*Troilus and Criseyde*, II, 271-301)

一一 日本語訳は宮田武志訳 シェフリー・チョーサー『トゥロイラスとクリセイデ』(大手前女子学園アングロ・ノルマン研究所 昭和五十四年)に拠った。

一二 『愛のこころ』 *Amor est passio quaedam innata procedens ex visione et immoderate cogitatione formae alterius sexus, ob quam aliquis super omnia cupit alterius potiri amplexibus et omnia de utriusque voluntate in ipsis amplexibus et omnia de utriusque voluntate in ipsis amplexibus amovet prae cepit compleri.*

一四 谷村辰彦編訳『トルバドゥール恋愛詩選』平凡社、一九九六年、一一四—一七頁。

一五 And fro this forth tho refte hym love his sleep,  
 And made his mete his foo, and ek his sorwe  
 Gan multiple, that whoso took keep,  
 It shewed in his hewe bothe eve and morwe.  
 Therefor a tille he gan hym forto borwe  
 Of other syknesse, lest of hym men wende  
 That the hote fyr of love hym brende,

But thane felt this Troylus such wo

That he was wel neigh wood, for ay his drede  
 Was this, that she som wyght hadde loved so  
 That newere of hym she wolde han taken hede.  
 For which hym thoughte he felt his herte blede,  
 Ne of his wo ne dorste he nat bygyne

To tellen hir for al this world to wyme. (*Troilus and Criseyde*, Bk. I, II.484-504)

一六 筆者訳

一七 日本語訳は月村辰雄訳『十二の恋の物語—マリー・ド・フランスのレー』(岩波文庫、一九八八年)を参照。

一八 *The Romance of Guy of Warwick* ed. J.Zupitza, EETS Extra Series, Nos. 25 and 26.

John Simons, ed. *Guy of Warwick and Other Chabbook Romances: Six Tales from the Popular Literature of Pre-Industrial England* (Univ. of Exeter Press, 1998)

一九 第一巻「貴族の男性と平民の女の対話」

#### 参考文献

P.G. Walsh, ed. *Andreas Capellanus on Love*. London: Duckworth, 1982.

Chrétien de Troyes, *Cligés, Arthurian Romances*, Trans. D.D.R. Owen, London: J.M.Dent, 1987.

P. Meyer, *Le Roman de Flamenca*. Paris, 1901.

*The Romance of Guy of Warwick* ed. J.Zupitza, EETS Extra Series, Nos. 25 and 26.

John Simons, ed. *Guy of Warwick and Other Chabbook Romances: Six Tales from the Popular Literature of Pre-Industrial England*. Univ. of Exeter Press, 1998.  
 J.J.Parry trans. *The Art of Country Love by Andreas Capellanus*. New York: London: W.W.Norton, 1969.

邦訳文献および主要参考文献

- アンドレアース・カペルラーヌス、瀬谷幸男訳『宮廷風恋愛について』ヨーロッパ中世の恋愛指南書』南雲堂、一九九三年  
 オウイディウス、樋口勝彦訳『恋の技法』平凡社、一九九五年  
 モーリス・ヴァレンシー、沓掛良彦・川端康雄訳『恋愛礼讃』法政大学出版局、一九九五年  
 ジェフリー・チョーサー、宮田武志訳『トゥローイラスとクリセイデ』大手前女子学園アングロ・ノルマン研究所、昭和五十四年  
 ジェフリー・チョーサー、刈田元司訳『恋のとりにこ』伸光社、一九八四年  
 ジェフリー・チョーサー、榊井迪夫訳『カンタベリー物語』上、中、下 岩波文庫、一九九五年  
 ジェフリー・チョーサー、西脇順三郎訳『カンタベリー物語』、上下 ちくま文庫、一九八七年  
 ジャン・フラビエ 『アーサー王物語とクレチヤン・ド・トロワ』松村剛訳 朝日出版社、一九八八年  
 ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、石川敬三訳『トリスタンとイゾルデ』郁文堂、一九七六年  
 ペディエ、佐藤輝夫訳『トリストラン・イズー物語』岩波文庫、一九五三年

ギョーム・ド・ロリス、ジャン・ド・マン、篠田勝英訳『薔薇物語』平凡社、一九九六年  
 ダンテ『神曲』寿岳文章訳、集英社、昭和六十二年  
 見目誠訳『フラメンカ物語』、未知谷、一九九六年  
 月村辰雄訳『十二の恋の物語—マリー・ド・フランスのレー』岩波文庫、一九八八年  
 菊池淑子訳『獅子の騎士—フランスのアーサー王物語』平凡社、一九九四年

神沢栄三訳『ランスロまたは荷車の騎士』『フランス中世文学集一』愛と剣と』白水社、一九九一年  
 新倉俊一、神沢栄三、天沢退二郎訳『フランス中世文学集一、信仰と愛と』白水社、一九九〇年  
 沓掛良彦編訳『トルバドゥール恋愛詩選』平凡社、一九九六年  
 アンリ・ダヴァソン、新倉俊一訳『トゥルバドゥール—幻想の愛』筑摩叢書、一九七二年  
 ハスキングズ 野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、一九八五年  
 CSルイス 玉泉八州男訳『愛とアレゴリー』筑摩叢書、一九七二年  
 瀬谷幸男『あとがき—解説にかえて—』『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛指南書』  
 松原秀一『Moshé Lazar, Amour courtois et fin'amor』『芸文研究』二十  
 六号、八六—九六頁  
 新倉俊一『ヨーロッパ中世人の世界』筑摩書房、一九八三年

## 解説 — チョーサーと宮廷風恋愛 —

現代西欧に見られる男女間の愛と結婚、その感情や思念は中世にその起源をもつと云つて差し支えないだろう。一つの極に、情熱的で繊細で洗練された宮廷愛があり、その反対の極に生物の本能にもとづいた生殖愛があった。前者は近代以降のロマンティックな愛の情緒が特徴であり、それは十一世紀終わりに南フランスのプロヴァンス地方のラングドックに突然出現した。後者は古代から存在した「自然」の概念が、十二世紀にやはりフランスのシャルトル学派と呼ばれる哲学の一派により、人間と動物に備わった自然な愛、言い換えれば種族保存のための生殖愛と結び付けられたことにより始まる。

トロイ戦争を背景に繰り広げられるチョーサーの壮大な恋愛物語『トロイラスとクリセイデ』(Troilus and Criseyde)は、南仏に生まれた宮廷愛の影響を色濃く受けつつ、一三七八年の第二回目的イタリア旅行で彼が得た成果を生かして書かれた。トロイアの王子トロイラスと寡婦クリセイデの恋物語を描いたこの物語の直接の典拠は、ポッカッチョの「恋に打ちのめされた男」(U. Filostrato)だが、トロイ戦争の物語が中世の人々の間に大変人気があったことが背景としてあり、チョーサーはすでに存在したフランスやイタリアのトロイ物語を参考にして、さらに彼自身の創案による筆を加えている。確実に彼が使用した典拠として、ブノワ・ド・サント・モールの『トロイ物語』(Le Roman de Troie)、グウイドー・デル・コロンの『トロイア物語』およびその中世英語訳があげられよう。結果としてチョーサーが創りあげた恋物語は、恋を嘲る主人公トロイラスがクリセイデを一目見て激しい恋におちいり、彼女に求愛して愛の歓喜を体験した後恋人との別離を余儀なくされた末、裏切りにあい絶望の果てに戦場に赴いて死を求めた悲哀を描いたものとなっている。

チョーサーのポッカッチョ改変の方向は、これまで、二人の恋の展

開をより厳密に宮廷風恋愛のパターンに従わせたことと、ポエティウスの哲学に依拠して内容の深化をはかったことの二つに集約されてきた。宮廷風恋愛とは、既に述べたが、十一世紀末に南フランスのプロヴァンスで発生したとされる「至純の愛」、別名「フィナモール」(Fin amor)が、アリエノール・ダキテーヌがルイ七世と結婚したことにより、北フランスに渡りそこで規範化され倫理化されてアムール・クルトワ(amour courtois)となったものである。この規範はアリエノールの娘、ジャンパーニュ伯夫人マリーのお抱えの司祭アンドレの手により、『愛について』(De Amore)と題されてラテン語で著された。この書は結婚が家門の安定をはかるための手段でしかなかった時代に、「愛とは何ぞや」という問いかけを女性の側にたつて論じた「愛の手引き書」であり、既に日本語訳も出版されている。

宮廷風恋愛を論じるにあたっては、C. S. ルーイスのあげた四つの特性、(一)謙讓(二)礼節(三)姦通(四)愛の宗教がこの愛の性格を最も端的に表していると思われる。女性は政略結婚の手段でしなく、子孫を残すための道具としか考えられていなかった時代に、突然男が意中の女性にへりくだり、礼儀をつくして彼女に奉仕する全く新しい男女の愛のかたちが、自ら作詞した詩に旋律をつけて楽器を奏でて歌うトゥルバドゥールたちによつてもたらされた。この愛は身分の高い既婚の女性が意中の女性とするのが通例であり、また愛は宗教に似た言葉で礼讃され、愛された女性は神のように崇拜された。彼らはヴァーナス、キューピッドという独自の神とその神殿をもつ宗教儀礼を發明し、恋する男の苦しみを強調した。十二世紀のフランスで生まれた宮廷愛は、現実と文学の両方の世界において久しくヨーロッパ宮廷社会の理想であり続けた。この恋愛は、強く理想化された性的情熱——それは時代を問わず、あらゆる社会に見られる「恋におちいる」という情熱であるのだが——きわめて繊細で、洗練された情緒によつて動かされる振

舞いを重んじた。このロマンティックな愛、官能的で繊細な愛の情緒はたちまちのうちにヨーロッパ中世の宮廷を席捲した。まずは南フランスからイタリアへと向かい、清新体の詩人たちを通じてダンテにその華を咲かせた。また、南フランスから北フランスに渡ってトルヴェール (*trouvères*) と呼ばれる詩人たちを生み、「薔薇物語」にその大輪の花を咲かせ、北はドイツへと渡ってミンネジンガー (*Minnesinger*) と呼ばれる詩人兼音楽家を輩出させ、イングランドに渡りこれから論じることになるチャョーサーの詩に不朽の名作を残した。

十三世紀に書かれた『薔薇物語』 (*The Roman de la Rose*) は前後編から成り、それぞれ全く異質の二人の詩人によって書かれているが、ギョーム・ド・ロリスによって書かれた前半では、宮廷風恋愛のバイブルともいえるほどの全ての側面を見事にアレゴリーを用いて描き出している。チャョーサーは詩人としてはまだ駆け出しの頃、すでに後半の一部を含む『薔薇物語』前半すべてを中世英語に翻訳しその精華を自分のものとしていた。さらに、二度のイタリア旅行によって芸術・文学の新しい思潮を吸収していたが、とりわけ二度目の旅行ではボッカッチョの作品とじかに触れたことにより、彼の「恋に打ちのめされた男」と『テセイダ』 (*Il Teseida*) を換骨奪胎して、『パラモン』 (*Palamon*) と『トロイラスとクリセイデ』 (*Troilus and Criseyde*) を書いた。

『正しき恋愛技法論』 (*De Arte Honeste Amandi*) と題された司祭アンドレの書は、言ってみれば恋愛の手引き書で、「愛とは何か」と題された第一の書では、愛の持続、成長、衰え、終わりなどを論じている。「いかにして愛を持続するか」と題された第二の書では、三十一か条からなる「恋愛の法規」が記され、第三の書「恋を斥ける」では、烈しい恋愛否定と女性攻撃の文が連ねられ、それ以前のロマンティックな愛のプロセスが取り消されている。

チャョーサーの『トロイラスとクリセイデ』では、恋愛の細やかな心

理やその愛の成就に至る過程を『薔薇物語』に負っており、直接アンドレの手引き書を参考としたものではないが、一目惚れ、恋患いの症候群、甘い苦しみなど、主人公の愛の進展はおおむねアンドレが規範化した宮廷愛の規律に類似している。既に述べたように、この詩の主題はトロイアの苛酷な運命を背景に描かれるトロイラスとクリセイデの愛であり、作品は五巻から成っている。第一巻と第二巻ではトロイラスの求愛と、それに続いて彼がクリセイデの心を獲得する様子が語られる。第三巻は、金星であり、恋の女神であるヴィーナスが鎮座する第三天界への祈りで始まり、二人の愛の成就が確かなものとなる。この巻は事実上、恋人たちの肉体的情熱にたいする讃歌、祝婚歌である。クリセイデはギリシャ軍の捕虜となつているトロイ軍のアンティノーと引き換えに、ギリシャの陣営に行くことを余儀なくされ、恋人たちは離別する。それに続いて、クリセイデはギリシャ軍のダイオミディーゾスの礼儀をわきまえない、せつかな求愛に身を任せてしまい、彼女の裏切りにより二人の愛情は破局を迎える。トロイラスの絶望は大きく、その心は死へと向かう。トロイラスはダイオミディーゾに復讐を試みるが失敗に終わり、猛々しいギリシャの将アキリーズに戦闘中に殺されて最期を遂げる。トロイラスは天の高みで眺める地球を見おろし、地上の一切を空しいものだと思ふ。だが、ここで突然、語り手は口調を変え、彼がそれまで語ってきた人間愛を不道徳だとして否定し、アンドレにならうて自らの詩の「取り消し」 (*palinode*) を宣言して恋の一大絵巻の最終章の幕を引く。

「宮廷愛の詩人」といわれるチャョーサーだが、そもそもコートトリー・ラヴといわれる愛の様式はどこに由来し、またどのような愛をさすのか、以上にアンドレア・ホプキンスの『宮廷愛の書—トゥルバドゥールの恋愛讃歌』 (*The Book of Courtly Love: The Passionate Code of the Troubadours*) からまえがき、第一章、第二章を訳出した。

## 文獻目録

## 一次資料

ジェフリー・チョーサー、宮田武志訳『トゥロワイラスとクリセイデ』  
 大手前女子学園アングロ・ノルマン研究所、昭和五十四年  
 ジェフリー・チョーサー、刈田元司訳『恋のとりこ』伸光社、一九八  
 四年。

B.A. Windeatt, ed. *Troilus and Criseyde* "The Book of Troilus" by Geoffrey  
*Chaucer*. London & New York: Longman, 1984.

J.H. Fisher ed. *Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. Second  
 edition. New York: Harcourt Brace College Publishers, 1989.

Larry D. Benson, ed. *The Riverside Chaucer*. Boston: Houghton Mifflin,  
 1987.

## 二次資料

Asaka, Yoshiko 'On the Ending of *Troilus and Criseyde*' The English  
 Language and Literary Society of Waseda University, 1990, pp. 5-18.

Donaldson, E.T. *Speaking of Chaucer*. 1970; rpt. London: Athlone Press,  
 1977. pp. 84-101.

Kellog, Alfred L. 'On the Tradition of Troilus's Vision of the Little Earth'.  
*Medieval Studies*, vol. 22 (1960), 204-213.

Robertson, D.W. 'Chaucerian Tragedy', in *Troilus and Criseyde & the  
 Minor Poems*, vol.II of Chaucerian Criticism, ed. Richard J. Schoeck  
 and Jerome Taylor. Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1965,  
 pp. 86-121.